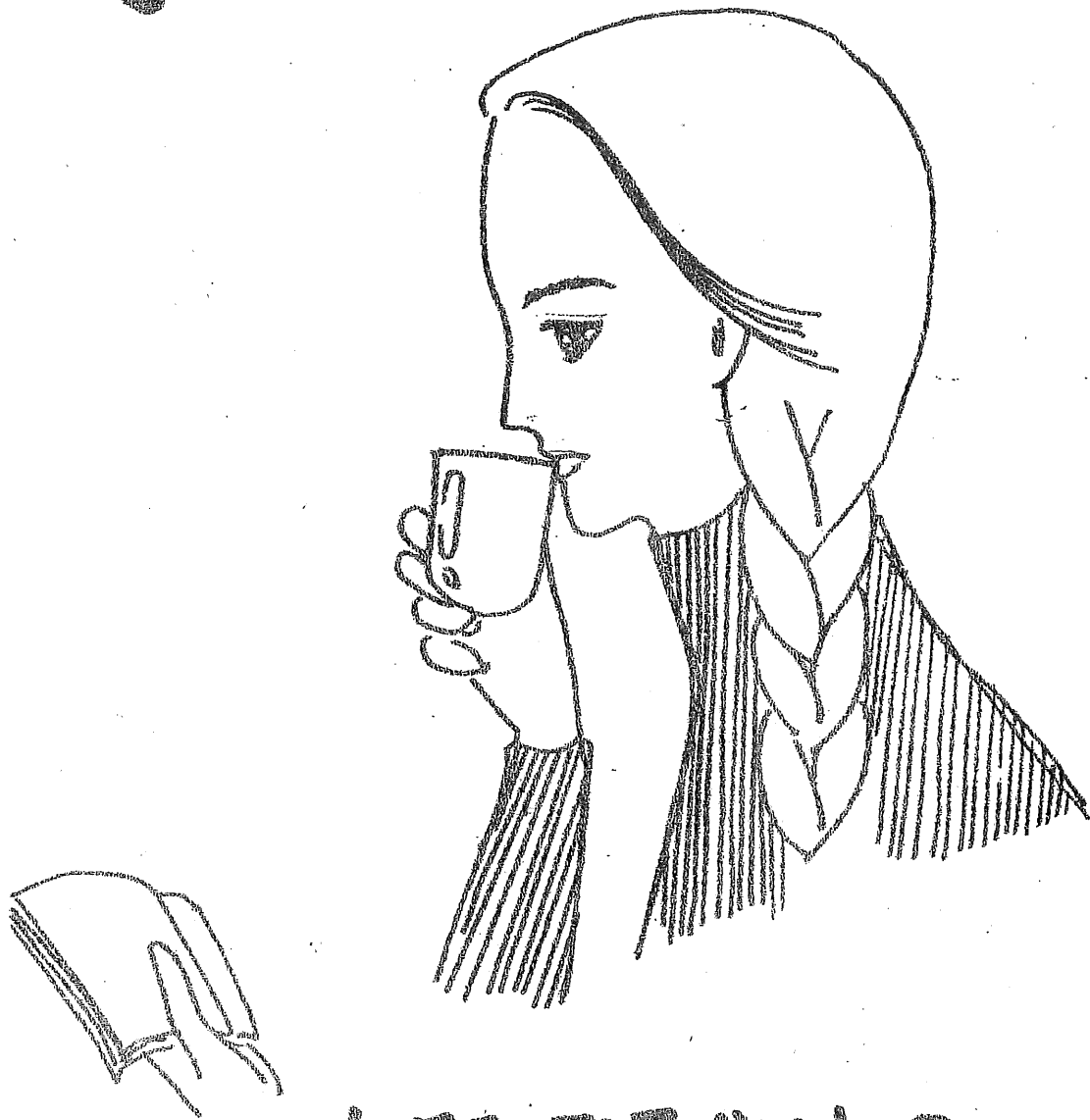


# 女たちへ



女研研通信 No. 8

# 『女性学ゼミ』開講のお知らせ

女である以前に、自分は一個人なんだ、そう考え始めた時、私達は私達を取り巻く環境が、(人=男)という奇妙な考えに支配されている事に気づきます。私達は、(人=女+男)という当たり前の事を、当たり前にするための運動を、今くり広げていかねばなりません。

今まで、女性に関する問題の多くは、男の目を通じての評価に終始して来ました。しかし、女にとって男がわからなりのと同様に、男の口から告げられる女性論が、理想論、それも男にとって都合の良い理想論、でしかなかった事は否めなんでしょう。男の偏見により、女子教育は教育問題、婦人の地位は労働問題というように、分断破壊されていた女の姿を、今、私達女の手で、あるがままに、一つのものとして掘き出しましょう。そして、私達が直面している様々な問題を、新しい体系の中で捉え直していきましょう。それが女性学です。

既にアメリカでは、約200の大学で約5000の講座が、又、イギリスでも20大学で40講座が持たれています。1968年、ユネスコも女性学を人権教育として推進すべきだと報告しています。

私達は、'82年度からの開講に向け、'81年度は、自主ゼミの形で、準備を進めてきました。今年使ったテキストの中で好評だったものは、来年からのゼミでも、導入として使っていく方針です。具体的には、秀合恵子、中山千恵などの文庫本で、誰でも気軽にゼミに参加できます。

講師は文学部社会学教室の宇野早己さんとお願ひする事になりました。新入生の皆さん、それから志参の方々、是非是非女性学ゼミへ参加してください。

## 11月祭企画の報告

### 女の性は誰のもの? Part II 講演会「買春」(21日)

PART I 「ポルノグラフィは女への暴力である」スライド上映会につづいて、最近特に問題となっている「買春」、とりわけ買春観光をめぐる問題をとりあげ、講演会を行ないました。正直なところ、この企画の準備から実際の講演を行なう過程で私たちは自分たちの力不足を痛いほど感じました。

買春の問題、更に広くいえば性の問題に関して、なかなか言葉にできない、なにかしら胸によどむものは多いのに、まとまった形にならない、何回となく集まりながらなかなか煮つまらない話のなかで、そうしたもどかしさを感じました。

そしてもう一つ、私たちが今、現実は何をなすべきなのかということ、もっとも大事なこのことがはきりと見えてこないことが、大きな焦りとしてあります。買春観光反対の声は一定高まっているけれども、私たち一人一人がどうやって有効な闘いをはじめていったらいいのか、本当にアジアの女たちにつながる運動をどう作るのか、こうした問いが、講演会の後に私たちに残されました。私たちは、この講演会を1つの手がかりとして、そうした現実の問題を考えていかなければならないと思います。

講演当日は、寒い中60人余りの参加を得、討論も含めて、4時間を越える長い集まりになりました。講演は、稲垣紀代さんと、深江誠子さんからで、それぞれ、フィリピンでの買春観光をめぐる状況と、買春観光を支える日本での文化的基盤ということを中心に話してもらいました。講演の詳しい内容は、京大新聞に掲載されますので、ここでは簡単に紹介したいと思います。

稲垣さんの講演は、フィリピンで買春がおこる経済的基盤は何かということが中心です。フィリピンの大方の人は非常に貧しい生活を強いられているが、

この貧困が、売春せざるをえない女たちを生み出している。では、なぜ貧困かという、一つには、スペイン、日本、アメリカと続く植民地化の歴史の中で地主制が導入され、ほんのひとにぎりの大地主によって土地のほとんどが所有されていること、そして、同時に本国と植民地の間の「分業」がもちこまれたことにより、農作物など本国向けの輸出用のものが耕作面積の中で大きなウェイトを占め、自分たちの食べるものがなくなっていること、そのため、現金が必要となった小作人、農業労働者たちは都市へ流出するが、働き口はなく、女たちは売春へと追いこまれる。こういう構図がある。更に、日本等から「援助」という形で借り受けた借金を返すため、ドルがいる、そのため国策として観光すなわち買春観光を奨励しているという事実もある。しかし、その観光収入も、最近では、外資系の会社（日本が多い）にほとんど吸い上げられるしくみになっている。客が売春婦に渡した金の半分位は、何やかやの名目で、日本の観光会社、ホテル関連企業に入るようになっている。こうした観光産業を支えているものとして、日本で、男は仕事人間、女は消費人間にやらされているということが一つあるのではないか。

深江さんの講演は、買春観光を支える日本の文化的基盤とは何かということを中心です。日本の中での問題として、私たち一人一人の中にある問題を考えていかなければならない。一つには、日本の教育制度に関してであり、私たちは相手の人権を認め、誰に対しても同じ態度をとるという教育はされてこなかった。そして自分とは違った立場にいる人たちと出会う機会がない。したがって東アジアへ行くと、いっても人々が見えない、そこから学ばないということになる。ヨーロッパ人にはペコペコするくせに、アジア人やアフリカ人は見下すということにもなる。もう一つは家制度というものが根深くあることの問題点。男と女がお互いに対等に働きあう関係をつくっていくということがない家制度の中での男と女の関係が、男が外に出るとモロにあらわれてくる。これは男だけでなく女にも責任があり、とにかく家を守り、少女のことはがまんしようという女の生き方、エゴが男を被害者にしてい

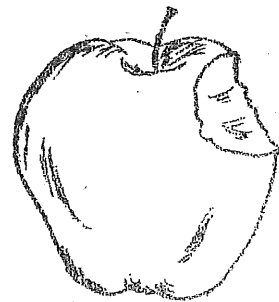
っている。私たち女自身、自分のやっていることが誰かを慮げていないか常に考えなければならない。また、売春そのものを批判すること、売春婦を汚らわしいものとするのはちがう。

★女のスペース トリビューン (11月祭期間中、20日~23日)

昨年に引き続き、女のスペース・トリビューンと称して、期間中文学部4演習室で、各種パンフ、ミニコミの展示販売、スライド上映会等々を行ないました。来て下さった方、パンフを買って下さった方、ありがとうございました。

・「広告の中の性」スライド上映会 (11月23日)

製作者の一人、上野千鶴子さんに来ていただき、スライド上映会を行ないました。日頃、何気なく見過ごしがちな広告、その1>1の女・男のポーズ、表情が、実はどんなメッセージを受け手に送っているのか、動物行動学の観点から分析したスライドを見、討論を行ないました。



## もっと多くの怒りを!!

by Aquir

この差別に満ちた腹立たしい社会の中で、女は本来の怒りを奪われていた。他のすべての抑圧された者たちの歴史と同じように。女は閉じこめられた家の中でグチを言ったり当たりちらしたりすることしか許されなかった。グチやハつ当ちは、噴き出す方向を見失なって歪められた怒りの形である。

今でもその構造はそんなに変わってはいない。表面上、女を閉じこめる檻のような「家」はなくなつたように見せかけられ、女は職場へ「自由に進出」するようになった。しかし、「進出」した女がある年令に達すると、この社会は断乎としてこう言う。「もうそろそろいい旦那さんを見つけないと嫁き遅れますよ。退職、結婚して幸せな家庭を築きなさい。かわいい子どもを育ていい母親になり、子どもから手が離れたらまた別の職場へもどっていらっしゃい。家計の補助になるくらいの賃金は払ってあげましょう。でも、いつでもいい母親であることが一番大事なんです。家庭をおろそかにしてはいけません。」社会は、女が小さい子どものときから同じようなことをささやき続けているものだから、女は、ともすればそれが自分の心底からの望みだと思いこんでしまう。こうして女は、目に見えない檻、近代化された檻の中に自ら閉じこめられてしまい、大切な家庭を死守させられる。女は怒りをもってその構造を打ち砕くことができなくなってしまう。それでも人を完全に柔順な奴隷にしてしまうということは不可能だから、彼女はときどき不満を発散する。グチったり、ハつ当たりして。

怒りは新しい建設のための破壊だ。怒りとは必ずしも、怒鳴ったり、激しい口調で何かまくしたてたりすることではない。人が何か社会変革の行動をするとき、その行動は、必ず旧い社会構造に対する激しい、あるいは静かな怒りを伴って

いる。怒りが行動の原動力だともいえる。しかし、そうやって怒ることは「女らしくない」ことなのだ。

社会に怒り、行動を起こす女を、大多数の男たちは「怒り、ばい」「欲求不満」「男まさり」「勝ち気」と排除する——少なくとも自分の伴侶としては。「女性解放なんてワーワー騒いでいても男に笑われるだけ」と言った若い女がいた。け。恋人を、そして未婚を早いとこつかまえて結婚しなけりゃ飯も食えないかもしれなくて、ワマはじきにあう世の中だもんね。それに、恋人もいないなんて淋しいしカッコ悪いもんね。おとなしく、適当にナメめかしく、適当に賢く、ね。(別に男の前では「うっソー!」「ホントー?」「カーワイイ!」だけしかしゃべらない女のユてもいいけどね、ちょっとフライドが……。) こうやってしまっは酷だろるか——。

男にあげつらわれようが、同じ女の一部に眉をひそめられようが、もっと怒らなくてはいけないと思う。怒った!よし何とかしてやるぞ、という怒りなら、多少過激に発露してもどうということはないんじゃないか。怒りが身近かな男やわりあいましな男に一時集中してしまってもかまわない。男全体を変えるためには、男たちの中に、本当に男の立場から性差別に怒る男があちこちに出てこなくてはならないと思う。身近かな男にこそそうなってもらわなくて、どうして私たちがのびのび生きていけるだろうか。人間は、他人の怒りによってインパクトを受けることが実に多いと思う。まあ、人を変える(そして自分をも変える)ためには、ちょっと戦略が必要だろうけれどもね。まるで自分が女の怒りの被害者であるかのような意識を持ってしまった男を、私は何人か知っているから。

それにしても、本当の女の怒りはまだ少なすぎると思う。もっと怒りを、そしてもっと多くの女の怒りを。怒りに衝き動かされる行動を。性差別根絶の運動を。もっと!

地下運動

雪女

あたしの乳房は たわめと裏り  
闇に うごめく  
あかき肉<sup>からだ</sup>体の 放熱が  
闇に とけこむ

闇 . 女 . 闇  
女 . 闇 . 女  
そんな 女の地下運動

闇に . 闇に .

閉じ込められた女たちが  
いっせいに 仰らめまです  
白き腕<sup>うで</sup>を さしのべ、フタ<sup>ふた</sup>はり .  
フタ<sup>ふた</sup>はり、唱い、ざわめきほがら  
出口を求め、おしよせる

地下から地上への 放熱が  
鉄を溶かし  
アスファルトを 回転させ  
時計をぬじまげ  
硬質なものたちを 溶解する

闇から光へ

燦出し 陽を浴びた 溶流は  
微岸ほものどもを呑み込み  
刃を塗り込め  
かたくするは 執着に  
再び 杯橋のつばさを 投げつけた



# ノーベル賞ファイバー. に思う. by みち.

京大工学部の福井謙一氏が、ノーベル化学賞を受賞した。けれど「アッシには何のかわかり合いもネエこと」と思っていたが、周囲のあまりのフィーバーぶり。アホらしさを通り越して、何やら無気味さを感じる。無性に腹が立つ。

佐藤栄作やキッシンジャーの平和賞を持ち出すまでもなく、ノーベル賞自体の「政治性」はあつとくにして、米田総長なんぞが「おかし」しゃしゃり出て、「京大アカデリズムが、学問自由の伝統が……云々。」だろ？ フーン、高尚な「学問」のためには、放射能の汚し流しもしょうがないワケか。うろたえい住民、や学生、職員なんぞのからは、機動隊から、守ってもらおうということだ。ナルホド、ナルホド。

…… ぞり、マスクとあけけの鐘、太鼓。こうなると、何やらぞり臭さを感じ、  
「日本人は優秀だ。アジアの小国とバカに可なり!!」。自動車を  
見ろ、クルマをみろ!。貿易マサツは、他国のひかめ、戦力が弱いとバカにし……。  
不況のつぎの踏む世相、「明日」ニュースに飛びつきにくくなるのは、由かりますヨ。産業用ロボットまで登場しての機械化が進めば、失業がふえるのは当然。国際的売込み合戦に勝ちのいるためには、生産コストを上げるわけにはいかず、その代り賃金を押し上げなければならぬ。ところが外国が自分とこの市場荒らしをためらうワケない。必然的に貿易マサツ。賃金を押し上げた国民に買う金はあるはず。とんかつまりの不況。先行不安の欲求不満じゃ、「日本人優越論」の、ぬいまくらたプライドにこそ飛びつきにくくなりますヨネ。でも優越論の裏側に、差別、排外主義は、つぎの、行きつく先は、ファシズム? ゼンマイいんた「ア」と、ナムアミダブツ。

もひとつどうも 腹が立つ。自分一人を着替えてみても謙一さん。

その世話をやく。良策さん。なるほど、「妻のおかけ」と感謝する謙一さん。女が男につくのは当然と。ふんぞり返る男に比べればマシな可也。幸せそうに涙ぐむ。良策さんに、他人が「干つける筋合」は百いれもしない。しかし、それなら、「良い意味での日本人らしく」「日本女性の鏡」などと、ハンに持ち上げ「るのもやめたい。女が仕事や研究に没頭して家庭をかざりみず、着替への世話を夫にさせない。世間やマスコミは何というか。仕事や研究を、しつづけることすら、抵難とし、賃金も待遇も差別するのかが現実じゃないか！ 最近、ことにけたまひ、女は家庭に帰るの声。女男役割分業固定化の動き。この女男の役割固定化の思想が、どんなに女を苦しめ来たことか。女だから、女のせいで、女だから...云々。女があるかゆえに、どんなに生き方が制限されたことか。「働王バチ」を支え、「研究一筋」を支える妻の「内助」が、彼女の他の可能性をつみとった上に成り立つことと、どうして、祝福などできまじう。女を憐れんと思ってる!!

福井氏のノーベル賞受賞という、「個人的」な出来事か、マスコミ通い意味付けされた上で、天下は流石の中に投じらぬといく。その流れが、女と男とをより束縛し、侵略競争体制へと、真しくものぞくように、私には感じられる。そのことか、くやししいし、腹立たしい。しかし、私に一人一人の行動の結果のつみ重ねが「歴史」でもある。歴史を動かすのは、私たちにし、その責任も私たちにある。

アー、大物にたつた気分!



## \* 結婚考 \*

kyko

年末年始にかけて郷里に一ヶ月近く戻っていたのは 数年ぶりのことだ。音信不通だった友人の幾人かが、結婚したり婚約したり、恋愛中だったりしているのを見聞きすることも珍しくない。友人と会ってお喋りするときも、「誰々が結婚した」という話が、「そうそう、そういえばねえ……」という言葉とともに 思い出したように、はさまれる。二ん々なかで改めて、結婚って何だろうと考えこまれた。私の負しい想像力は、根本的には「性の異なる他人と生活すること」ではないという答しか与えてくれない。でも、それだけのことならば、別に「結婚」という形にしなくても可能なことだとは、気づくけれども。結婚に至るプロセスは、それぞれにいろいろあって千差万別のように思われるが、結構ある一定のパターンに添って動いているようにも思われる。そのひとつである結婚式、どう考えこみても、この代物は、ただけない。結婚した友人のひとり曰く「うっとおしいけれど、親の気がそれぞれ済むならと思ったの。形だけの式でも済んでしまえば、その後の生活は 私たちで好きなようにできるもの。」……ふうん、それはそうかもしれないな、と思う。一緒に暮らす男と女は皆それぞれに、“特殊な場合”なのだし、少なくとも画一化された結婚式というセレモニーよりは、生活は、そこに暮らす人の貌をより鮮かに映し出し得ると思ひから。でも、現存している結婚式の形及び結婚(生活)の内容は、必ずしも、あの樽子家制度と無縁ではないことを思うと、両手を挙げて、「それはそうね、カタ子だけ借りてやっちゃえば、後はこっちのものだもの」とも言えない気がする。親たちの言い分を

聞けば、結婚式をすることによ、2. 相互扶助の人間関係がある親戚づき合いにおける瀧つなぎが出来ることが大切なのだという。でもそれは、つまつめていけば、結婚式自体ではなく、それに付随している例の披露宴というものの内容であり、性格である。

それでは一体“結婚式”そのものは何なのよ? ということにな、てくる。神式だとか、仏式だとか、キリスト教式だとかいう、ああいうものは何なのだろう。結婚しようとする二人が、ナントカ教の信者である場合には、信者であるから、それに準じた結婚式をしてもよいだろうと思う。宗教を信じていなくても、例えば、女の解放を信じるなら、女の解放の名のもとに、なんともいいではなかろうか。(尤もこれだと婚姻そのものが矛盾になるかしら?) 他にも、反原教のもとに、とか 機械文明への皮肉をこめて人間の尊厳のもとに、とか いいんじゃないかなあ。しかし、大部分の人たちが、無宗教であるにも関わらず、ホテル等のおしよせの結婚式で無難に式をあげちゃうのは一体どうしてだろうか。何だかとても馬鹿げている。どこかで書いてあったように、男と女が愛し合っ、セックスしたり生活したりするのに、たかが紙きれ一枚の婚姻届とか式とかが、これほど重要な筈もないじゃないかと開き直りたくもなる。するとどこかで、いや、真剣な気持ちならば責任のあることをしてもらわないと、という声がする。他人と生活していくということは、勿論いい加減じゃ言えないし、真剣に向き合ひ覚悟がないと、出来ることじゃない。こんなふうに考えをいくと、かつて庶民の多くが事實婚であったということは、その後の生活の封建的性格を為すにしておれば、とても素敵な姿だと思える。生活——お互いの存在に根ざした生活こそ、何よりも雄弁な二人の結びつきの証人だろう。

## 「結婚」断章

## 瑣瑣

私の周りでは、ここ1兩年結婚ブームだ。友人・親戚・研究室etcの知り合いで結婚した、もしくはしようとしている人20人ほど。かくゆう私もそのひとりだ。つまり、それだけのケースは、それだけのいるんなことを考えさせる。

同窓生のトップノミ切で結婚した彼女の旦那は建築家で、四国の旧家の長男だった。結婚するにあたり、相手の家で彼女の名前を「観えもらっ」たら新しい姓と相性が良くないだろう、「名字が変わるんやし、この際名前も変えとしまったら……」と言われたそう。彼女がひどく傷つけられたことは想像に難くない。それやこれやでワタワタになつていた結婚式の1ヶ月前、彼女は相手の男に「結婚するって、男と女とどっちが大変だと思う？」ときいてみたそうなんも当然お答え一それとぬぎらいーを期待して。）すると彼氏、即座に答えていわく、「もちろん男の方さ」と。横マンやるかたなく、彼女は私にそのことをグチった。

ケンカラン男だと思ふ。連れ添う相手の気持ちを感じたことがあるのかと思ふ。か、男の方が大変に決まっているという気持ちも、わかるような気は、する。彼の描く図面で、これから一家を支えていかなければならないとしたら――。もし設計ミスでもあれば、妻子が露頭に迷うではないか！

結婚というものは、一体何なのか、もうひとつよくはわからないが、それまで別々に生きてきた2人の人間が一緒にやっぺいこうというのだから、大変なことにはちがいない。当然ながら、しんごい譲歩をして歩み寄る必要が起きるわけだが、この世の中の「結婚」のシステムは、そんなとき女の方が全面的に男に合わせるという方法で、その解決をはかろうとするものであるようだ。女がそれだけの犠牲を払って、男に合わせたので

あれば、男は女に対して責任を持つ——生活を支える——のが、人間と人間の思いやりのルールというものだろう。このやり方——そしてその他のもろもろを含む婚姻制度なるもの——は、それなりによくできたシステムだと思う。

人と人がかかわり合う上での、どうしても避けられない利害や感情のゆきちがいを処理するしかたとして、なんのなんのといわれながらそれがこの世の中で機能しているのは、やはりそれだけの理由があるのだろう。哀しいことに、この世の中に生きている人間は今のところ、例えば男と女がかかわり合うときに生じる利害や感情のゆきちがいを、自らの判断と責任で個々のケースごとに処理できるほどに強く、成熟してはいない。婚姻制度に不満を持ってみても、それなくしてやってゆけるほど私達はまだ賢くない。

「結婚」に際して、女たち、男たちが味わったつらさとしんどさが、せめてもろもろの非人間的な側面を持つ婚姻制度など必要としないように人間をきたえるものとなってほしい、と思う。

## 〈投稿〉 女の問題……

by メロン

①社会生活 工作中独身の有無をきかれる。このことは仕事を考えるより家庭に入らないの？と言うのと同じみたくて仕事に没入する女をばかにしていると思います。同一作業が終わった後、男の人はそうじを頼むよとポンと言います。このことは、当然のように女の雑事と見下していると思います。広いTVつき休憩室も男子多数で占められています。女のそれは、窓がふさがって暗い。このことは、同一人間にとって耐えがたいものです。男は横暴で、女は弱く黙っていると思

います。

②勉学生活 下宿の人が勉強より結婚したらと言いました。このことは、未婚女子を男の所有物と見ていると思います。以前バイト先で、試験勉強で早退を言うと、そんなもん位で駄目と言われた。このことは、店主の理解度もあるが、働きつつ学ぶことは女には重荷のように受けとられていると思います。

## 編集後記

◆編集完了直前、「私にも書かせて」と嬉しいとびこみがありました。投稿者は、働きながら大学の通信課程で学んでおられるメロンさん。メロンさんの話を聞いていると、ダラダラと0年間(ないしょP)も大学にいながらテッテ一的に振業をさぼり続けている編集子は身につまされました。(なお、編集子は今年度も留年の予定です。)

◆女解研もこの春で満2才。これからギリギリと2年分の総括にはいります。「女たちへ」をお読みの皆さん、ぜひ率直なご意見、ご批判をお寄せ下さい。「未熟」を自棄して8をかけたような私たちですから。今後ともよろしく。

◆風邪がはやっています。皆さんお身体にお気をつけて!



七解研通信 No.8

七解研

編集 京大七解研研究会

発行 1982. 2. 8

連絡先 京大文学部 学友会 受付  
tel 内線 2722